

マックス・E・アマンの 世界馬術界展望

マックス・E・アマン氏は政治ジャーナリストから馬術界に転身し、障害飛越のワールドカップを創設しオーガナイズするなど馬術界に多大な貢献をしてきた人物だ。そのアマン氏が、世界の馬術界の過去から現在までの話題を縦横に語る。

text: Max E. Ammann design: DynamiteBrothersSyndicate

総合馬術の 110年

障 害飛越と馬場馬術の歴史は数世紀前までさかのぼれる。両競技ともに人と馬の関係の中から自然に生まれたもので、16世紀にはそれぞれの競技が行われたことが記録に残っている。

馬場馬術の起源はヨーロッパの宮廷、中でもイタリア（ナポリ）、フランス、ドイツで馬術の技を披露したことにある。障害飛越は軍隊と裕福な農民が自分たちのお気に入りの馬がいかに高い飛越の能力を持つかを示したのだ。

しかし、総合馬術の歴史はこのふたつとは違い自然に起こったものではない。この競技は馬場馬術、障害飛越、そして馬場の外の野原での騎乗、いわゆるクロスカントリーという3つの競技を組み合わせたものだ。平地の2点間を競走

するレースはあったが、クロスカントリーは1900年までほとんど知られていなかった。クロスカントリーは軍が必要として生まれた。フランス陸軍が馬の能力を測るための競技として、まず戦闘前に従順さを馬場馬術によって、戦闘後の調整を想定して障害飛越を行い、そして平原での戦闘を想定したクロスカントリーが行われたのだ。このようにして、1902年にパリ近郊で最初の3日間にわたる総合馬術競技が開催された。

それは「Championnat du Cheval d'Armes（軍馬の選手権）」と呼ばれ、フランスが国を挙げて開催した競技会だった。1905年には国際的な大会として組織された競技会がブリュッセルで開催され、4カ国から37のライダーが集まった。ベルギー人はこの競技会を「ミリタリー（軍事）」と呼び、その後も同じ大会に対してさまざまな呼び方をするようになる。フランスはあくまでフランス流の呼び方を1939年まで崩さなかった。1945年以降は、これを「コンクール・コンプレ（完全なる競技）」と呼び、これこそがおそらく最良の命名だろう。ドイツ人はこれを「Vaisertigkeit（万能）」、そして「Buschreiten（灌木内の騎乗）」と呼んだのだ。スイスは「軍事」を使い、イギリスでは「ホーストライアル」がこの競技の名称として1949年に決まると、バドミントン、ヘアウッド、バレーの地で人気を博すようになる。アメリカでは70年代から競技に参加をし始め、これを「Combined

Training（組み合わせのトレーニング）」と呼ぶようになる。

「E」はこの名称問題の陰に隠れていたが、80年になってやっと解決に取り組み。この競技は「3-Day Event」または「Eventing」と呼び、競技者は「Eventer」と呼ぶことに決めたのだ。

何と呼ばれようとも、この新しい競技はそのスタートの1902年から非常に人気が高かった。面白いことに、03年にパリで最初で開催された「Championnat du Cheval d'Armes」の優勝者はマダム大尉で、前年、ブリュッセルで開催されたエンデュランスライドで優勝したオステンンドが乗っていたのと同じ、サラブレッドのクラーージュが優勝馬だった。さらに、2位のボージル大尉は、同じ年に開催されたエンデュランスライドのパリ大会でドヴィールが優勝したのと同じ、ミダスに騎乗した。912年のストックホルムは、馬

1 術競技が競技として加わった最初のオリンピックで、総合馬術は3つの馬術競技のひとつだった。以来変わることなく、この3つの競技はオリンピック種目としてずっと残っている。

総合における上位入賞国は時代とともに変化した。1912年から20年の間、スウェーデンの優勢は揺るがなかった。スウェーデンはオリンピックの申し子ともいえるベッキラレンス・フォン・ローゼン伯爵を擁し、彼が牽引役を務めた。彼を支えたのがスウェーデン陸軍から選抜された軍人で、その強さは他を圧していた。24年から

右:2000年、シドニーオリンピックで自国に優勝をもたらした総合のチーム。左からダリエン・パワーズ騎乗のアンドリュウ・ホイ、ハウス・ドクター騎乗のフィリップ・ダットン、キバ・サンドストーン騎乗のマット・ライアン、ジーブスティア騎乗のステュワート・ティネイ。左:88年、ソウルオリンピックで個人の金メダルを獲得したニュージーランドのマーク・トッドとカリスマのクロスカントリー競技。©Kit Houghton





総合馬術は正式には馬場馬術、クロスカントリー、障害飛越の順に3日間をかけて行われる。写真は88年のバーレイで開催された競技会に出場したイギリスを代表する女性ライダー、メアリー・キングの演技。メアリーは2頭の馬で出場しクロスカントリーと障害の写真はインペリアルカヴァリエ、馬場はアパッチ・ソースに騎乗。©Peter Nixon/FEI

イギリス人ライダーの国際的な競技会への出場は、はじめは軍出身と一般人のライダーが混在していたが、やがて一般のライダーのみとなり、また男性優勢から次第に女性の活躍が目立つようになると変遷を重ねていく。

アルバート・ヒル、ローレンス・ロック、フランク・ウエルデン、シーラ・ウィルコックス、そしてのちにリチャード・ミード、マーク・フィリップ、デレック・オールフ、ジェーン・ブレン、メアリー・ゴードン、ワトソン、ルシнда・プリオア、パールマー、ヴァージニア・ホルゲイト、イア

マックス・E・アマン

1938年、スイス生まれ。1964年に渡米しニューヨークの国連本部詰め外国人特派員として主に政治関係のジャーナリストとして活躍。69年に『スイス・アメリカン・レビュー』紙の編集長に就任。73年にスイスに帰国し、『ルツェルン新聞』に編集長として迎えられる。そのかわら、馬術競技観戦が趣味だったことから馬術関連の記事も手掛け、翌74年に国際馬術ジャーナリスト連盟 (IAEJ) の会長に就任。78年新聞社を退社、以降、馬術のさまざまな大会でディレクターを務めるなど多大な貢献をしてきた。

28年はオランダの年だった。オランダは20年代にヒルバールシウムで総合馬術の国際大会を開催し傑出した3人のライダーが活躍した。チャールズ・パフッド・デ・モルタンジ、アドルフ・フォン・ターブルト・フォン・ジップ、ジェラルド・デ・クルーイフはパリとアムステルダムでのオリンピックで圧勝した。

32年はアメリカがホームグラウンドであるロサンゼルスで優勝し、36年は同じくドイツがベルリンで勝利を得た。第二次大戦後の48年に開催されたロンドンオリンピックでイギリス人は文字通り総合馬術という競技の存在に気づいた。49年にはさっそく最初のバドミントン大会が開催され成功を収める。これを受け、ヘアウッド大会とバーレイ大会が続いて開催されるようになった。イギリス人ライダーも総合馬術に目覚めたかのように49年以降、その躍進が著しい。イギリス人ライダーの国際的な競技会への出場は、はじめは軍出身と一般人のライダーが混在していたが、やがて一般のライダーのみとなり、また男性優勢から次第に女性の活躍が目立つようになると変遷を重ねていく。

イギリスに続き、国際的な舞台で活躍している国を挙げてみよう。ニュージーランドは2度のオリンピックチャンピオンであるマーク・トッドと彼の馬、カリスマを擁しており、オーストラリアは92年、96年、2000年と3回連続でオリンピックでチーム優勝を遂げている。そして、フランス、アメリカ、ロンドンのチャンピオンであるドイツ。さらにさかのぼれば、カナダは1978年の世界選手権で優勝し、その実力を世に知らしめ、イタリアは64年のオリンピックで優勝している。そしてスウェーデンは83年と93年にヨーロッパ選手権を制した。